

## 7. 二つの大会から

### 1991年度 第35回板野郡同和教育研究大会要項

#### 1. 主 旨

就学前教育、学校教育ならびに社会教育の中で、同和問題に対する科学的認識を深め、同和問題の解決がなぜ国民的課題であるかを日常生活の中で明らかにし、いかに差別解消に向けて実践しているかを話し合い、地域の実態に即した同和教育の効果的な実践の推進に資する。

#### 2. 主 催

板野郡町教育委員会連絡協議会  
板野郡同和教育協議会  
板野郡同和教育研究会

#### 3. 後 援

板野郡町長会  
板野郡教育会  
板野町

#### 4. 日 時

1991年6月25日(火) 13:00~16:30

#### 5. 日 程

13:00~13:20 受付  
13:00~14:15 公開保育(就学前)  
13:30~14:15 公開授業(小)  
13:30~14:20 公開授業(中・高)  
14:40~16:30 分科会

#### 6. 会 場

板野東幼稚園	就学前
板野南小学校	1年・4年
板野東小学校	2年・6年・「障害」児学級
板野西小学校	3年・5年
板野中学校	全学級公開
板野高等学校	全学級公開
板野町民センター	社会(成人) 問題提起(板野町) 分科会のみ
板野町市民ふれあいプラザ	社会(婦人) 問題提起(上板町) 分科会のみ

#### 7. 参 加 者

- (1) 板野郡保・幼・小・中・高校職員
- (2) 郡内各教育委員会職員、教育委員、同推協会員、婦人会員、公民館、隣保館、教育集会所職員、高齢者学級生、P T A会員、その他同和教育関係者

## 8. 研究主題

「差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう。」

## 9. 分科会主題

分科会	主題
就学前(幼・保)	—すべての子どもの生活を就学前教育の視点から確立しよう— 0才からの発達のすじみちを明らかにしながら保育内容を創造し、具体的な実践のなかで、子どもがどのように変容したかを交流しよう。
小学校(低)	外見・能力等による差別事象をしっかりととらえさせ、仲間の大切さをわかるため、どのように実践しているか。
小学校(中)	身のまわりの偏見や差別の不当性に気づかせ自他ともに認めあう仲間意識を育てるため、どのように実践しているか。
小学校(高)	部落差別の不合理や矛盾に気づかせ、それにかかわる差別をなくすため、集団づくりをどのように実践しているか。
小学校(障)	「障害」児の生きぬく力をどう支え、教育を受ける権利をどう保障しているか。
中学校	部落問題解決への意欲と実践力を持った生徒を育てるため、教育内容を明らかにし、きめ細かい実践を大切にしているか。
高等学校	人権意識を高め、部落問題解決への意欲と実践力を持った人間を育てているか。
社会(成人)	部落問題解決へのP.T.Aの実践。
社会(婦人)	差別の現実から深く学び、差別のない明るい地域社会を創造するため、婦人としてどのように実践しているか。

## 10. 公開授業及び分科会場

学校種別	主題・題材	資料名	学級	指導者	分科会場
就学前	友だちと遊ぼう		きく組	西川明美	板野東幼稚園
			うめ組	後藤博子	
			ゆり組	山本恵美	
小学校1年	だまっていないで	さるとかに	1年松組	井内節子	板野南小学校
小学校2年	友だちを大切に	たけしくん	2年松組	北岡央充	板野東小学校
小学校3年	聞いてほしいことは	楽しいな学校	3年1組	松本ミチ子	板野西小学校
小学校4年	本当の仲間	いっぺんどなつたら か	4年松組	片岡つるえ	板野南小学校
小学校5年	正しい職業観をもつ	父の仕事	5年1組	岸田好正	板野西小学校
小学校6年	差別に立ち向かう	虫おくり	6年松組	林 達也	板野東小学校

「障害」児	みんななかまだ	ブレーメンの音楽隊	菊組 桜組	市川佐枝 田村千秋	板野東小学校
中学校1年	真実を見つめて	牛のかたき打ち	1年A組	北岡八千代	板野中学校
	識字学級に学ぶ	識字学級の作品から	1年B組	宮崎忠裕	
	強く生きる	解放への明日	1年C組	清重郁子	
	真実を見つめて	牛のかたき打ち	1年D組	瀬尾孝	
	強く生きる	解放への明日	1年E組	榎村光世	
	真実を見つめて	牛のかたき打ち	1年F組	吉成正士	
中学校2年	識字運動に学ぶ	長いおしゃべり	2年A組	板東正幸	板野中学校
	識字運動に学ぶ	識字運動のとりくみ	2年B組	吉住隆文	
	識字運動に学ぶ	夕焼けが美しい	2年C組	赤澤賢次	
	識字運動に学ぶ	長いおしゃべり	2年D組	次本知己	
	識字運動に学ぶ	夕焼けが美しい	2年E組	日浅由美子	
中学校3年	人間としての生き方を求めて	ふるさと	3年A組	佐野富子	板野中学校
	誇りうる生き方を求めて	同和教育への希い	3年B組	森口健司	
	人間としての生き方を求めて	同和教育への希い	3年C組	仁木真之	
	人間としての生き方を求めて	ふるさと	3年D組	後藤田寿子	
	誇りうる生き方を求めて	同和教育への希い	3年E組	阿部憲作	
高等学校1年	部落問題学習の問題点と課題 一部落問題の起源をめぐってー	じんけん	11 H R	日下カズ子	板野高等学校
			12 H R	武田順子	
			13 H R	塩田明美	
			14 H R	鎌田幸義	
			15 H R	横堀恵子	
			16 H R	吉岡直彦	
			17 H R	小倉智子	
			18 H R	黒田善克	
			21 H R	吉田光昭	
			22 H R	中野守	
高等学校2年	部落差別の実態に学ぶⅡ	じんけん	23 H R	新居明生	板野高等学校
			24 H R	佐野貴子	
			25 H R	楠本昌明	
			26 H R	矢部玲子	
			27 H R	田村伸代	
			28 H R	後藤昌之	
			31 H R	播磨義博	
			32 H R	古田彰信	
高等学校3年	進路保障を考える ー就職差別の実態ー	じんけん	33 H R	吉永紀美子	板野高等学校
			34 H R	藤岡志津子	
			35 H R	牧野千恵	
			36 H R	北原頭彦	
			37 H R	西野晴美	
			38 H R	宮田凡	
社会(成人)					町民センター
社会(婦人)					ふれあいプラザ

## 第21回 徳島県中学校同和教育研究大会要項

### 1 目 的

「同和問題の早急な解決は、国及び地方公共団体の責務であり、国民的課題である。」と同和対策審議会答申が指摘して26年になる。

この間、中学校における同和教育は、同和教育研究団体や部落解放運動の遺産と伝統に学びながら多くの成果を収めてきた。

今、「地対財特法」期限切れを控え、中学校においてもさらに同和教育の深化徹底を推進しなければならない。

私たち教職員は、同和教育に取り組む姿勢を検討しながら再確認し、生徒たちに展望を持たせ、部落解放の資質を高める研修に努めなければならない。

このときにあたり、本研究大会は、各中学校における具体的な研究や実践を交流するなかで、同和教育の理念を確立し、より豊かな教育内容を創造することを目的とする。

### 2 主 催

徳島県中学校同和教育研究会

### 3 後 援

徳島県教育委員会・板野町教育委員会・徳島県同和教育協議会

4 日 時 1991年11月19日（火） 9：00～15：30

5 会 場 板野郡板野町板野中学校

6 研究主題 「差別の現実に深く学び、生徒の未来を保障する教育を創造しよう。」

——部落問題解決への意欲と実践力を持った生徒を育てるために、

教育内容を明らかにし、きめ細かい実践を大切にしよう。——

7 参 加 者 徳島県中学校教職員・同和教育関係者

### 8 日 程

	9:00	9:30	10:20	10:30	12:00	12:50	
受付	公開授業	移動	分科会	昼食	全体会		15:30
					開会行事	板野中発表	主講張演
							閉会行事

## 9 公開授業

学年	領域	主題・題材名	指導者名
1 A	道徳	差別に立ち向かう 「五郎の場合」	北岡八千代
1 B	道徳	" 「母のように」	宮崎忠裕
1 C	道徳	" 「五郎の場合」	清重郁子
1 D	道徳	" 「五郎の場合」	瀬尾孝
1 E	道徳	" 「五郎の場合」	榎村光世
1 F	道徳	" 「和子さんの日記」	吉成正士
2 A	道徳	解放運動に学ぶ 「人間に光あれ」	板東正幸
2 B	道徳	" 「渋染一揆」	吉住隆文
2 C	道徳	" 「水平の旗をかけて」	赤澤賢次
2 D	道徳	" 「渋染一揆」	次本知己
2 E	道徳	" 「人間に光あれ」	日浅由美子
3 A	道徳	誇りうる生き方を求めて 「水平社宣言」	佐野富子
3 B	道徳	" 「水平社宣言讃歌」	森口健司
3 C	道徳	" 「水平社宣言讃歌」	仁木真之
3 D	道徳	" 「水平社宣言」	後藤田寿子
3 E	道徳	人の世に熱あれ人間に光あれ 「水平社宣言」	阿部憲作

## 10 分科会

	司会者	助言者	問題提起者	記録者	運営委員
一年部会	堀北茂生 (吉野中)	横山正 (大麻中) 尾山慧子 (同振課)	中吉孝典 (上板中)	青井博道 (藍住東中) 富田忍 (上八万中)	宮田嘉彦 (吉野中)
二年部会	嵯峨久明 (三好中)	近藤篤行 (上板中) 福永恒仁 (同振課)	山口雄三 (山城中)	金井敏信 (美馬中) 矢田嘉久 (市場中)	川村豊臣 (鴨島東中)
三年部会	満石高明 (牟岐中)	川真田靖雄 (鴨島東中) 笛田英治 (同振課)	今津久仁 (牟岐中)	中島公生 (立江中) 福良毅 (高鉢中)	峯野高明 (海南中)

## 11 同和問題学習に取り組んで

板野中学校

## 12 主張

- 仲間とともに伸びる
- 私とおじいちゃんと学習会

鴨島第一中学校 2年 大坪央佳  
石井中学校 1年 吉岡香織

## 13 講演

演題 「たたかいは炎のように」 高知市長浜の教科書無償闘争

講師 高知県教育委員会同和教育課 中内康博先生

※私の同和教育観

板中に赴任してから1年余りが過ぎ、県中同研大会は私にとって、生徒たちにとって登るべき大きな峠であった。今一番感じていることは、やはり教師が変わらなければ生徒は変わらないということを改めて確認したことである。

昨年板中に赴任することが決まったとき、親や近所の者が「板野は悪いんだろう。気をつけろよ。」と口々に言った。それは板野に対する誤ったイメージを持っていることであり、その心の奥には対象地区を意識していることが明らかである。私は対象地区にかかる悪いイメージを小学校高学年の頃から何度も聞くようになった。しかし、そのことが間違っているとわかったのは中学生になってからである。当時文部省指定同和教育研究大会があったことにより、どんな授業がなされてきたかはよく覚えてないが、親や親戚が言っていることが間違っていることは、私にははつきりわかった。そんなことから家庭で部落の話が出ると、いつもけんかになつた。そんな時代が何年か続いた。やがて私は、教師になりたいという夢を果たすため、親元を離れ県外の大学に進んだ。生活が変われば、部落問題はどこか遠くにあるものとして、この問題からは意識が薄れていった。自分には関係のないものだとして捉えるようになっていた。そんな私が教師になった。今思えば、教師になって初めて赴任した学校で、同和教育にすべてをかけてきた先生方に出会わなければ、私は平気で子どもたちを傷つけていく教師になつたと思う。その先生方から学んだことは、教師が変わらなければ子どもは変わらないということであった。それは自分が部落問題とかかわってどう生きてきたのか、また、どう生きていくのかを子どもたちと共に語ることであった。しかし、部落問題にかかる話を聞くたび、胸が苦しくなった。その苦しみは、私が差別者であるということを何度も自覚していくことであつた。部落問題にかかるて何もしていないから差別をしていないんじやなくて、何もしていないから差別者なんだということ。中学生のころ、部落問題でよく親とけんかをしていたけれども、大人になるにしたがつて部落問題から次第に遠ざかる自分のなかに、差別意識が根付いていたこと。その差別意識を洗うことから私の同和教育は始まった。そして、自分がその差別意識をどう解消していくのか、どう解消していこうとしているのかを子どもたちに語らなければ、それは本当の同和教育にはならないということを知つていった。それは子どもたちが教えてくれた。私自身のすべてを語らなければ、子どもたちは心を開かないし、口先だけのきれいごとで終わることが何度もあつたからである。

#### ※板野中学校へ赴任して

「板野は悪いんだろう。気をつけろよ。」と口々に言つた親たちに対して、「そんなことあるかい。生徒はどこもみな同じや。教師が生徒を大切にすれば生徒もそれに必ず応えてくれる。いらん心配すんな。」と言い返したのを思い出す。教師として、人間としての私の真価が問われているんだという気持ちを胸一杯抱いて本校に赴任したことを思い出す。しかし、それが気負いとなり、「自分は教師なんだ。弱い部分を見せてはならないんだ。」という傲慢さになり、自分の差別心にはほうかむりをし、被差別の立場におかれている生徒に「私が教えて私が助けなければ。」という姿勢で生徒にかかわっていたことを反省する。私は何度も同じ過ちをおかしてきた。部落の人たち、子どもたちの思いや願いを抜きにしての同和教育は絶対にありえない。いつもその思いや願いに寄り添い、自分のこととして捉えていなければ同和教育は成立しない。私の傲慢さは被差別の立場に立っていない証であつた。

昨年度より全体学習が始まった。この学習を通して私も生徒もものすごく変わってきたようだ。生徒が差別者として、また、被差別の立場から自分の苦しい胸のうちを語る。それに心を動かされ、自分のこととして考え、また語る。私は差別者として、どのように自分の生き方を変えていくかで迷っていた。被差別の立場に立ちきるというが、それがどうすることか、どのように行動することが考え続けてきた。被差別の立場からものを見、考え、行動するというが、心の底から部落差別の悲しみに寄り添い、怒り、闘っていくことができていなかつたと反省する。私にできることは、やはり自分が部落問題とかかわってどう生きてきたか、また、これからどう生きるのか、このことを語ること以外にないことを子どもたちが教えてくれた。自分と部落問題とのかかわりを語るとき、生徒たちの同和問題に取り組む姿勢ががらりと変わってきた。生徒たちの眼が輝きはじめ、私の語りの中に自分を見るように、自分のこととしてとらえだした。生徒たちと私が一つに重なっていく喜びと、かつての醜い自分、心の底にある恥ずかしい部分が語れる喜びを感じながら、同和問題学習を続けることができた。しかしながら、こうなるのが少し遅かつたと反省する。全体学習は今年の場合、回数の多さに私自身がついでいけず、生徒とじっくり同和問題を語れぬままに資料に流されてきたように思う。それは私自身が解放の主体となって取り組めていなかつたことであり、他の学級の生徒、他の先生方に迷惑をかけたことを反省する。

#### ※「水平社宣言」に取り組んで

「水平社宣言」に取り組み出してから私自身が語れ、生徒たち自身が語れだしてきた。「水平社宣言」を通して自分を語る、私自身を語つていった。部落問題といつ出会つたか、そのと

き何を感じ、どうしたか、そしてそれからの部落問題とのかかわりを語り続けていった。その中で、自分の間違っていたこと、弱かつたこと、人間としてみにく生き方をしてきたこと、人間性を喪失していたことを克明に語っていった。そして今、部落問題にかかわってどう生きるのかを語っていった。中島一子さんの「手紙」を「水平社宣言」の「人の世に熱あれ 人に光あれ」の思いに重ねて授業をしたときのことである。すべての差別の解放を願った中島一子さんの生き方に、私の友人のことや近所の娘さんが重なり、部落差別への「怒り」が自然に涙に変わり、中島一子さんの願いをみんなで受け継いでいこうと授業を終えた。このとき、「わたしたち3Eは、郡同研であれだけ燃えて同和問題学習に取り組んできたのに、2学期になってからその取り組みが、次第に後ろに逆戻りしていたように思う。前に進むのは少しづつだけど、逆戻りするのはアッという間だと思うんです。今私達は、同和問題をもう一度自分のこととしてしっかりとらえて、前を向いて進んでいかなければならぬと思います。」と生徒が語った。そのことに気付いた生徒たちは、無関心になりがちな自分、この問題から逃げかかっていた自分、部落差別が遠くにあるものとして捉え、自分の問題になっていなかつた自分に目覚め、より力強く同和問題学習に取り組むようになった。

中同研当日の授業は「闘いの炎を燃やそう」を合言葉にして、私ももちろん生徒たちも感動しながら授業を進めることができた。今日がどんな日であるかを生徒たちがそれぞれに捉え、発表することができた。私にとって、また生徒たちにとって嬉しかったことは日頃発表できなかつた生徒が次々に発表していづたこと、地区出身の生徒が堂々と胸をはって「ふるさと」を名のつていつたことであり、どの生徒も必死で考え、発表することにより友を支え、また自分を語つていつたことである。

授業後の生徒の感想には、「今日のみんなの発表は、今までと違い、発表した私を支えてくれ、そのことが勇気となって私もまた発表する気持ちにさせてくれました。」と書き、また、「最近私達のクラスが暖かく感じれるようになつたんだけど、今日はもつと暖かく感じました。なんか、初めて3Eが一つになつたような気分です。」と書いてきた。「本当にみんながんばつた。最高の授業だった。初めて発表する友達がいた。また仲間が増えたような気がした。あの時、3年E組のクラスが一つになつた。みんなが「水平社宣言」という一つのものに取り組んでいた。なんか、やっぱりE組つていいなあと、改めて感じた。たぶんみんなも同じだと思う。授業中寒かつたけど、寒さなんかとんでいつた。逆に熱くなつてきた。みんなの意見を聞いてみると私も発表したくなつた。もしあの時発表していなかつたら一生後悔していたと思う。おかげさかもしれんけど・・・。今まで学習してきてやつと峠を越えられたように思う。これからもずっとずっと続けて峠を越えていきたいと思う。もっともつと熱くなりたい。私にとってあの授業は今までの自分を変えてくれたものであり、それはみんなも同じだったと思う。たつ

た1時間だったけど、すごく大きな大きな授業だったと思う。」と書いてきた。「今、私達の胸に燃えている差別解消の炎はこれから先、絶対に消してはいけない。いや、絶対に消えないんだ。燃やし続けて生きるんだ。」と語り、中同研はあくまで通過点であり、この世のあらゆる差別が消え失せるまで学び続けることを誓い合い、授業を終えた。

分科会では「教師すべての人が同和問題に真剣に取り組めば、必ず差別はなくなるはずだ。教師は自分の心の中に差別にまず気付き、自分の差別心を洗うことなしに差別解消の闇いははじまらない。」ということを自分のことを経験にして伝えたかった。少しの時間であつたが、言いたいことがすらすら言えたのは自分の成長だと思う。しかし、部落差別がある限り、差別と闘い続けなければならない。自分の幸福のため、生徒の幸福のため、がんばり続けたい。あらゆる差別がこの世から消えた日にこそ本当の喜びの涙を流したいと思う。

#### ※課題

私のクラスには授業に出られないA男がいる。A男は昨年度から担任していたが、春休みに生活が乱れ、街に出てはけんかを繰り返していたようである。3年生になり話だけでもできるように家庭訪問を繰り返していくが、もうすでに遅かつたのである。3年生が始まれば学校生活から遠ざかってしまった。私たちの知らないところで生活の荒れはどんどん深くなっていたのである。「なぜ学校にこない?」「しんだい。」それの繰り返しあつた。私のお説教じみた言葉など聞く余裕もないほどに疲れきっていた。2年生の時、何度か問題を起こしていくが、学校生活も明るく過ごしていたので、3年生になつても大丈夫だと安心しきっていた私であつた。しかし、A男の持たされているしんどさや生活に、私は十分かかわれていなかつた。春休みの間に私は何もA男にかかわつていなかつたのである。今、A男に対して、私は何もしてやれなかつたという傲慢さではなく、A男の持つしんどさを私が共有できていなかつたという私の反省であり、それが私の胸の痛みである。それからはA男を理解しようというだけの一年であつたと思う。今、A男の進路も決定し、中学校から卒業とうとしている。A男と部落問題の話をするとたび「みんなかっこばつかりじゃ。きれいごと言うな。中学校を卒業してから今しようことをずっとやれるかどうかで、本物か嘘かわかるんじや。」とA男は言ってきた。私たちは、本物か嘘かA男にみせていいきたいと思う。そして、A男を見守つていきたいと思う。それが私の今後の課題である。

## 県同研大会を終えて

仁木真之

(1) 今回の大会とそれに向けての2年間の同和問題に取り組んだ日々で多くの事を学んだ。これでやっと同和問題について話し、語る一步を踏み出すことができたのではないかという一種の満足感と、今後の自分自身のあり方こそが問われていくのだという緊張感がある。

ここまで185名の生徒と3年教師団を燃焼させたエネルギーは何だったのか。昨年の初めての学年部会において確認したのはこの大会を念頭においての、研究授業の実施とその授業記録をとること、オリエンテーションを実践していくことの2点だった。板野中学校における初年度が同和教育に対する期待が不十分な形に終わったことにたいする反動という部面もあった。「同和教育とは何なのか?」という知的な面における関心の寄せかたであったように思う。それが上記2点の計画の起点である。2年生という比較的緊張感の少ない学年主任としての抱負と気負いがあった。わずかに初年度に担任した2名の対象地区生徒の思いに応えられなかつたという自責の念があつたものの、頭の中から生まれた意欲であったようだ。

これが全体学習という当初予期しなかつた形と成果を生み、大会を越えて教師としてのあり方を問う形で今日まで実践できたのは、森口先生の存在であり、常に議論し迷いながらも前を向いて進んだ学年の先生たちの存在であり、生徒の存在であった。

森口先生の同和問題にかける情熱一執念一はまず生徒の心を動かせる。形ばかりに終始しそうになった全体学習に魂をいれたのは森口先生の「怒り」であっただろう。全体授業においてM子が涙を見せた。これがそれまでの同和問題学習を質的に大きく変換させていくきっかけになっていく。今も、これまでの取組みを振り返るときこの全体授業を挙げる生徒が多い。生徒がゆれだした。建前に始まり建前に終わっていた生徒の発言に本音が入るようになっていく。それが教師をゆり動かすことになっていく。今年度になって火が付いたようになった。佐野先生が「私は1年間先生方と一緒に仕事したがそれによっては変わらなかつた。生徒の一言で目のウロコが落ちるような思いになつた。あの生徒の言葉が私を変えた。」という。私の思いもそれに変わることはない。自分の本音を切々と生徒に語りかけていった先生がいる。それによって貫かれるような衝撃を受け、立ち上がりうとする生徒。その生徒によって自分をみつめ苦しい思いの中から頑張った先生たち。私たちはこのような互いが互いを支え磨き合うような関係の中で変わってきたし、これからも変わっていきたいと思う。

教師の同和教育観が確立して初めて同和教育ができていくのではない。同和教

育観を確立していくために子供と共に苦しみ、迷い、悩みながらも進んでいく、実践していくのだということが初めてわかつってきた。勉強ができないからというのではなく、（考へてみれば今までの考への甘かったこと。言い訳のできる中ばかりにいたような気がする。）

これまで使っていた言葉の意味を問い合わせし、同和問題を考へていく上での本来の意味、実践を伴い、実践の裏付けを持って考へていこうとすることができるようになつたようにも思う。例えば「子供に学ぶ」ということの意味。それはまず子供が本音を語ることのできるような授業を成立させ（これがまず第一条件）、子供が突き付ける言葉を自分のものとして捕らえ、その苦しみを知ろうともがき、自分の本音の部分をみつめることなくしてはつかみえない。「先生はどうなつか」という生徒の問い合わせにどこまで真剣に応えようとするかによって「子供に学ぶ」姿勢は違つて来る。学ぶ、とは何かを教わることでない。どこまでその思いを共有できるかということである。そのことが初めてわかつてきた。「学ぶとは誠を胸に刻むこと。教えるとは共に希望を語ること」という教師なら誰でも耳にしたことのある言葉の意味が初めて実感としてつかむことができつつあるように思う。同和教育こそまさに「共に希望を語る」ものでなくてはならない。

本校でよく使われる「思い」「語る」「仲間」という言葉にも同じようなことを感じている。言葉の問題は単なる「言葉」の問題ではなく思想の問題であり実践を映す鏡であるような気がしている。

「先生、私せこい…」と言つた後藤田先生。奥さんをつれて石原先生のところに勉強に行つた阿部先生。そして、ある意味で我々をリードしてくれた佐野先生。よき同僚の中で自分の思い、考えをぶつけ合うことによってここまで来ることができた。この子たちの同窓会にはいつであつても胸をはつて出席できるようにしていきたい。そう考へている。

(2) 大会はそれなりの緊張は伴うもののむしろ郡大会の時のほうが事前の取組みは強かった。それだけ今回の大会が日常活動の一部となつていたことの証であると考えている。自然体に近い形で大会を迎へすべてのクラスが今までで最高の授業になつた。私のクラスは地区の生徒に弱い点がある。今までの同和問題学習に取り組む姿勢の弱さの表れであり卒業までの課題としての残された。それでも子供たちは精一杯の授業を展開してくれたと思っている。どのクラスも「見せるための授業」、言い替えれば「フリをした授業」でなかつたこと。「考へるフリ」、「悩むフリ」でなくあれだけの大勢の人の中で自分の問題として真剣に必至で考へることのできる子供たちの強さに教えられることが多い。自分が地区出身であることをなげなく発言することのできる生徒。この子たちが高校に進学し、あるいは社会にでたとき今の気持ちをどこまで持ち続けていくことがで

きるのか。それは私たちの問題でもある。この大会で終わりでなくまさにこれからが正念場であるという思いを強くしている。

一つの成果は西小学校出身の生徒の変容がある。初めて涙を見せたのは西の子供たちであった。同和問題に対する偏見の中で自分の本音に向き合うことの少なかった彼らが差別の温存や自分の差別心は今隣にいる友達を差別することになるという、現在の自分自身の問題として考えるようになった。それでもまだまだ部落差別一般についての偏見は存在する。本音を掘り起こし掘り起こしそれを越えようとする授業を卒業まで続けたいと思う。

大会そのものは今の板野中学校のできうる最高の形を示すことができただろう。それだけに学校としてもこれからが勝負であるという共通理解のもとで日常生活に根ざした同和教育を実践しつづけねばならない。そうでなければ今までのことがウソになる。

大会の形の面からいえば、多くの人に今までの取組みを聞いてもらえる時間が欲しかった。その点ではやや不満の残るものとなつた。

大会は取組みの初めの段階においては目標であったが今は一つの通過点に過ぎないという感じを持っている。

(3) 昨年の実践をまとめた。それは当初の予定ではあったがまとめてみて初めてわかったことがある。当たり前のことであるがまとめるによって初めて弱点が見え、次年度はそれを越えようとする意欲を持つことができた。「峠を越えて」は私たちの実践記録であると同時に、次年度へのバネになつていった。また、記録に残そうということで、残すにたりる実践をするのだという全員の暗黙の共通した意志があった。当然のことであるがウソはかけないものである。いい記録を残すためによい実践を心がけるということは一見本末転倒に思える。しかし、それでもよかったです。取り組む中から多くのものが見て来る。それを大事にし自分のものとすることこそが重要である。そのような意味も込めて私たちの連帯と同和教育への情熱の証として今年度も実践をまとめてみたいと考えている。

#### (4) 反省点

以上は私自身のプラスになった点を挙げてきたが不安や反省点も多い。以下思い付くままに挙げてみたい。

- ・生徒についていえば大会後や授業後の感想の形がどの生徒も非常に似通ったものになっていることが気になっている。どう表現していいかわからないし、またそのことをどう評価してよいのかわからないのだが。かつて学生のころそのようなことがあったことを思い出している。多くのことなるなる段階の感想や反省がかみあうことによってより大きな盛り上がりや発展があるのでないかと思う。その点についてはさらに考えていきたい。

- ・3年団の核となつたのは森口先生の存在である。その先生と周りの先生とのあり方について考えていくことはこれからの中学校において同和問題学習を進めていく上で重要なことのように思う。さらにいえば、森口先生という一個人の人格によって啓発させられたこの取組みをより普遍的なものにしていく為の取組みを考える必要があるということである。地区、地区外にかかわらず取り組む姿勢はおなじでなければならないが、現実には差がある。生徒の中に丸岡さんを見つける働きかけを学習会の中に求めることができ一つの方法と思うがさらに考えたい。
- ・全校的な取組みとして継続させていくこと。その方法について考える必要がある。同和教育は特別な教育ではない。日常的で継続的な教育活動である。むしろ教科教育のほうが特別と考えてよいように思う。このことを基本においての全校的な取組みを考える必要がある。



## 生徒とともに学ぶ

佐野富子

### はじめに

昨年から学校をあげて同和問題学習に取り組んできた。今までの自分とこの問題に取り組んでどう変わったかということより、板野中学校で八年間勤務して、私自身がこの問題と真正面から相対していなかったということを気づかせてくれたのが中同研大会へ向けての日々であった。

私自身、地区の生徒に必要なのは、十分な学力であり、一点でも一問でも多くテストで正解すること。そして、子どもたちの可能性を広げるためにも、学習に力を注ぐべきだと信じていた。そのため、ゆとり・学活などは学力補充に利用すべきであり、学力保障こそ差別解消の第一歩だと思っていた。そして、私自身も自分の腹の底をさらけだし、醜い差別心に満ちあふれた姿など見たくないという自己防衛でもあった。

しかし、それは人から尊敬される職業につき、地位や名誉を得、差別から逃げていく、本当に部落差別と向き合い闘っていくためのものではない。そんな本当の意味での生きる力となっていくような学力ではなかったということにはじめて気づいた。

### 郡同研までの日々

今年の四月、A子がこんな思いを書いてきた。「私は、部落に生まれたことをすごく恥ずかしいことだと思いますなんですかわかりません。あの学習会の通知をもらう時、なんかとても嫌な気持ちになります。この間友だちに「なあ、あの学習会の通知みた?」と聞かれたとき、私は、心の中でドキッとしてしまいました。小さいときから、部落は恥ずかしい所とは誰からも言われていません。勉強している時とか、周りの人からそう思わせられていると思います。なんか、いつになったらこんな思いせんすむんだろうかと思いません。」この文章を目にした時、私は、愕然とした。A子は、昨年より引き続き担任している生徒である。母親一人の手で育てられ、大きくなったら親孝行したいと願うやさしくて明るい素直な生徒である。私は、去年、いったい何をしてきたんだろうか。何を見て、彼女のすべてがわかったような顔をしてきたのだろうか。目の前で差別の重さでつぶれそうになっている子に、何もできていない、そんな中途半端なことをしてきたんだという想いでいっぱいになった。事実、昨年の私は、この学習では傍観者であった。185人全員でする学習がいやでたまらなかった。中学二年生という思春期で、何に対しても恥ずかしがる時期に体育館に入れ、まるでショーでも行うかのように子どもたちを踊らしていく。教師の指導力・学級経営を比べあうかのような、競争のような授業などしたくなかった。しかし、現実に、子どもたちは差別の渦の中にいる。どうにかしたい——そんな思いがほとばしった。そして、郡同研に向けて丸岡忠雄さんの「同和教育への希い」を学習していく中で、M子がある日、「先生、話があります。」と言ってきた。彼女は、丸岡さんと同じ地名をふるさとにもつ生徒である。情け無いことに、私は、まだ自分一人で同和問題の話をする自信はない。話はできるかもしれないが、彼女の心の奥底にまで届くことでの

きる話はできないM子の思い詰めたような顔をみて、M先生をよんでも話を一緒にしてもらった。M子が言う。「先生、私がもし部落でない人と結婚したら、私は、部落でなくなるんですか。」M先生がそれに答える。「君が、部落であるという証拠はどこにあるのか。周りの人間が君にそういうているだけでないか。明日から、佐野先生が自分は部落の人間ですと言い続けてきたら、きっと周りの人間は、佐野先生が部落の人間であると思うであろう。部落には、差別されつづけ、それに抵抗し、闘い続けてきた数多くの歴史はあるが部落であるという証拠はどこにもない。自分が部落でないと思っていても、自分が部落でないという確証はどこにもない。君が今一番必要なのは、部落差別から逃げることではなく、真正面から立ち向かって闘っていくことではないかと……」彼女は、あくる日のあゆみに、目の前の霧が晴れていくみたいで思っている。そして、学年同和弁論大会で、地区の友が涙を流して、自分自身を語る姿にこんな思いをよせてきた。「私は、みんなが言っているように、あの涙はそんなに素晴らしいものだとは思いたくはありません。涙は、本当にこの世から差別がなくなった時にみんなで肩を抱き合い、喜びの涙として流そうではありませんか。今の私には、涙は存在しません。涙は、私自身を弱くさせ、差別に負けそうです。かわいそうに涙なんていらない。ましてや欲しくはありません。」丸岡さん出会い、M先生に出会い、彼女は大きく成長していっている。

### 郡 同 研 の 日

子どもたちは、こんなにまで差別のおりの中に閉じ込められている。差別と向き合い真剣に考えていく中で、生徒が差別心をもっている自分自身のこと、親家族のことを書いてくる、そんなクラスの生徒を目の前にして、私の力でどうにかしたいというこの思いがあり、――をしてあげるという生き方が打ちのめされたのか郡同研の日だった。ちょうど丸岡先生の「同和教育の希い」を一学期、学習していく中、丸岡さんの（かくす）ことから（名のる）ことへ自己変革していった素晴らしい生き方を学んだ。そして、授業の後半B男が「先生は、なんで、ここぞ学習会の通知を渡すんですか何故、一言、がんばって学習会に行きよといわんのですか。先生は、丸岡さんの差別から立ち上がった生き方を僕たちに説いてきた。言っていることとしていることが違う。先生の言っていることは口先だけですか。」私自身今まで差別の重さをどれだけ自分のものとしてきていただろうか。子どもたちの苦しみをどれだけわかってきたんだろうか。私の心の奥にある部落の子どもたちを哀れむ、いたわるという思いは、そのこと自体、相手を低いもの、弱いもの、卑しいものとして差別しているんだということを教えられたように思う。相手がふれられる傷つくであろうと都合よく自分に解釈し、そのことを避けても、何ら問題は解決しない子どもたちの心の痛みを知った私が、勇気をだして声を大にして叫ばねばならぬ。まず、私自身の差別心を。子どもたちに、語れ、語れという前に、自分がこの問題とどうかかわってきたかを話さねば――このことにやっと気づいた。

### 中同研までの日々

中同研の授業の題材が決まった。「水平社宣言」何度も繰り返し読んでもわからない。

どのような形で授業を進めていったらよいか、かいもく検討も立たない。「証言全国水平社」の本を、ビデオを、水平社宣言に関連する部落解放の雑誌を、「荊冠の叫び」を……私が、わからずして、子どもたちに何か語れようか。むさぼるように資料を集め、読みあさった。でも、わからない。そんな時、方向づけをしてくれたのがI先生であった。I先生のおっしゃる言葉は闇夜を照らす一隅のあかりであった。I先生の話の中で授業がみえてきた。そして、一隅のあかりは炎となり私の心に自信らしきものがわきおこってきたあとは、生徒を信じ、突き進むしかない。授業の前日、子どもたちにこんなメッセージを送った。私の3Aの子どもたちへの精一杯の思いだった。

今私たちにできる差別解消にむけての行動は、手を挙げて、自分の思いを語ることが中心となる。差別を憎みこの世からなくしたいと願うなら、手を挙げて自分の意見を言ってみよう。上手に言う必要はない。みんなの考え、思いを聞き、語る中から新しい勇気が湧いてくるだろう。今まで、3年A組の仲間とともに取り組んだ部落問題学習を誇りとして、自分の願いや思いをしっかりと語っていこう先生もがんばる。みんなもがんばる。がんばって、がんばりぬいて、板野中学校で燃やした解放への炎を参会の先生方の心に灯そう。

「今のみんなはそれができる！」

先生は信じています。

### 中同研の日

たくさんの先生の見守る中、子どもたちは、自分の思いをぶつけた。プレッシャーなど感じさせぬ、気迫のこもった授業であった。生徒たちの熱と光がほとばしった。授業後、A子がこんな感想を書いてきた。「とても緊張して、なかなか手が挙がらなかつたけれど最後の私の一番みんなに言いたかった所、聞いてほしかった所を一番に発表しました。はじめは、胸が一杯になって、涙をこらえながら自分の意見を言いました。そして、K子やM子の意見を聞いて、私はまた、胸がいっぱいになって涙をひっしにこらえました。見に来ていた人の中にも涙を流す人もいました。けれど、C子の詩にもあったように涙を流すだけではいけないと思う。みんなとやってきた全体学習を団結として、私は強くなりたいです。私が強くなれた時、その時は、もう周りの人、世界が変わっていると思います。高校生になっても友だちを大切にして団結したいです。悲しみが喜びに変わるまで、あんなに学習会の通知にこだわり、部落を恥ずかしいとまで言っていたA子が、たくさんの先生、同級生の前で胸はって部落宣言をし、自分は、差別とむきあい闘っていくと語った。彼女は、ここまで大きく成長されたのは何かと考えてしまう。

そして、二人の生徒の発言が子どもたちの心を揺さぶった。この発言は、私が次の課題として考えていかなければならないものであった。M子とK子の会話を紹介する。

M子「私はK子に言いたいんだけど、私は、前に私は部落出身なんじょと言ったでしょうそのとき、K子はそんなん気にせられんよ。部落とは関係なしにM子は私の友だちじゃと言って私を勇気づけてくれました。私は、そのときのK子の言葉をうそとは

思いたくはありません。」

K子「M子にいった言葉は、絶対うそでないし、M子は私の大切な友だちじゃけん部落とかで泣いてほしくない。私は、絶対部落差別は許さんし、友だち泣かすような部落差別はけちょんけちょんにしてやりたいし、勉強しまくって完全になりたい。」

よく生徒の発言の中に、部落とは関係なしにという言葉がでてくる。今は関係ないかもしれないが、近い将来関係がでてきたとき、はたしてどうなるのだろうか。そのときがきたら、態度を豹変していくのだろうか。K子のようにM子と共に立ち上がり、差別解消にむけての行動が、はたしてとれていいくだろうか。また、部落のことなんて気にしていないという発言にホッとして、それでおわっている（満足している）地区の生徒もいる。私は、今こそ丸岡忠雄さんの言葉にあるように、真実をしかとみすえる勇気を、本物を見分ける確かなまなこの必要性を痛感する。部落の話がでたら、無関心を装い、相手の話に無言の同意をする。そんな今までの私の生き方は、一生懸命心を開き差別の憤りをみんなに訴えたM子やK子の存在を否定するのだということを心に刻みつけ、同和問題の研修会においてもM子やK子の気持ちを代弁していかなければならないと思っている。

### おわりに

昨年5月の染一揆で始まった185人全員による同和問題学習——卒業によって形としては終わるが、子どもたちの心の中に絶えず生き続ける学習となつたであろうか。そして、この学習こそ私自身のこれから生き方を問われ続けていると思う。大会のための授業ではなく、生徒・学校は変わっても、ずっと生涯取り組んでいきたい。子どもたちが自分の隣で共に頑張った仲間を高校へ行って裏切るような、売るような生き方だけはしないと誓ったように、私自身も185人の子どもたちとした全体学習を心に刻みつけ、たえず自分自身の差別心を洗いつづけていけるような生活を送っていきたい。

最後に、実践の少ない私を、あたたかく、ときには厳しく最後まで教え導いてくれた先生方に（とくにN先生）感謝の気持ちで一杯である。この仲間、この何でも話し合える関係があったらこそ頑張れたように思う。そして、3Aの子どもたちありがとう。あなたたちが私の先生でした。先生の目を覚ましてくれたのはみんな一人一人でした。3年間の思い出を短歌であらわそうといったとき、M子が書いてきたのは次の句であった。

「思ひ出は涙を流したあの中同研

今もわすれぬ心の糸」

今、信頼という糸で結ばれた3年生の仲間たち、この世から差別という二文字がなくなるまで、共に闘い続けよう。

## 中同研大会を終えて

六 車 和 行

郡同研・中同研と二回にわたり板野中生徒・教職員が一丸となって同和教育に取り組み、「人間としての生き方の自覚」を少しでも深め、本校の同和教育は確実に前進したように思われる。

研究授業を重ねるにつれて、諸先生のご指導やお励ましの言葉をいただき、やらねばならない気持を起こさせ、活気ある授業に取り組め、だんだんと充実した同和教育ができるようになったと考えられる。

三年生にとって、二年間にわたる全体学習は、クラスのものだけでなく、185名全員の意見を聞き、そのうえ自分の意見を聞いてもらえる場もつくられ、仲間意識・支えあう仲間づくりの大切さを一人ひとりが確実に胸に刻みこんだと確信する。

また、わたしたち教師自身もさらに同和教育観を身につけ、自信をもって積極的に同和教育に取り組んできたし、これからも取り組んでいきたい。

- ① 「同和教育は先ず教師が意識の変容をしなければならない」とよくいわれるが、二年間いろいろな思いを聞かされ、またその思いに対する教師の語りかけ、それによって一生懸命立ち上がりようとする生徒、教師もさまざまな思いや悩みをくりかえすという関係で、お互いに支えあって変容した。
- ② 何人かの生徒が部落民宣言をしたが、多くの支えあう仲間がいるという確信からだと思う。
- ③ 授業において、本音で思いを語りあえたことは真の同和教育のあるべき姿だと思う。
- ④ 全体学習を重ねるたびに多くの友の語りを聞き、その語りに自分の思いをつけ加えたり反論したりなど多彩な発言により授業にもりあがりをみせ、さらに友の悩み苦しみを自分のものとして捕らえるようになった。
- ⑤ 授業が終わって生徒に会うと、気まずそうな顔して「先生、今日発言しようと思ったがついにできなかった。次の時間はするけんな。」という生徒がいる。これも仲間意識のあらわれであり、励ましの言葉をかける機会が多くなった。
- ⑥ 同和学習を重ねるうちに、自分の思いをある程度長く語れるようになった。生徒の涙ながらの語り・熱のこもったか語り・先生に対する問いかけなど今一度考え、教師として「今の同和教育」について反省し、もう一度同和教育の本質を見極め、同和教育を深めていきたい。

## 中同研を終えての感想と反省

豊田 淳子

板野中学校へ赴任して8か月、あっという間に、中同研を迎えることになりました。この板野中学校での森口先生の同和問題学習に取り組む姿勢を拝見して、大きな刺激と感動が私の心の中で一杯になりました。同和問題学習に対する考え方の甘さと、勉強不足を身を持って教えてくださった校長先生をはじめ、仁木先生や3年団の先生方に心から感謝をしています。そして、それ以上に3年生の生徒に教えられ考えさせられたことが数多くありました。体育館で行われる全体学習、生徒の発言を聞いて何度も涙を流したことか。森口先生は「教師が泣いたらあかん。ほんまに泣くのは、この世から部落差別がなくなった日じゃ。今流した涙はすぐ乾いてしまう。私たち教師ががんばらなあかん。」とおっしゃいます。一度、私も全体学習の司会を経験しましたが、一時間の授業をうまくやれるかどうか不安ばかりでした。授業後、3Bの井上由香が、「先生もっとつこんだ質問せんとあかんわ。」と言ってきました。私より生徒の方が同和問題について、しっかりした考えを持っているのではと思い、反省させられました。

中同研の当日、授業をしない私も緊張ぎみでした。授業を見ていたいだくだけでなく、来てくださった先生方にも一緒にあって生徒とともに考えてもらう授業にしたいと3年団は考えていました。最初佐野先生の授業を20分程見せていただきました。対象地区出身の生徒が、「わかってくれんかったら、相手をなぐるかもしれん。」と発言しました。それに対しての意見が飛びかい、しらずしらずのうちに授業にひきこまれている自分に気がつきました。地区出身の生徒がそれをうけて、「暴力をふるったら差別に負けたことになる。わかってくれるまで話し合うべきだ。」と発言しました。いつの間にか、地区出身の生徒が強くなっているそして、その生徒を支えているクラスの仲間ができていると思いました。佐野先生の迫力ある設問に大きな声で答える3Aの生徒の声は、3Bの授業を参観されていた先生方に力強く生き生きと聞こえたそうです。次に後藤田先生の授業を見せていただきました。静かな雰囲気の中にも、後藤田先生の熱意が感じられました。5クラスの中では、一番おとなしい生徒のあつまりで、全体学習でも発言数の一番少ないクラスなのですが、19日の授業では、ある女子生徒の「傍観者になってはいけない。みんな発言しよう。」と呼びかけたおかげで、いつもより活気のあるすばらしい授業であったと思います。対象地区出身の生徒が泣ながら発言をしました。彼女の涙はこれで二度目。地区に生まれたことを、最初のころは恥ずかしいと思っていた彼女が、今までの同和問題学習の授業を通して、少しずつありますが、強くなりつつあると思いました。きっとあの涙は、地区に生まれた悲しみの涙ではなく、今だに残っている部落差別への怒りの涙だと私は思いました。対象地区出身の男子生徒が、「今泣いたらいけないと思う。」と吐き出すように心を語ってくれました。この男子生徒は、同和問題学習の授業のときは、ほとんど下を向き、自分には関係ないという感じの生徒だったので、今日の発言は、私にとって驚きとうれしさで一杯でした。そしてどうしようもなく涙が

こぼれました。こんないい子たちを部落差別によって苦しめてはいけないと痛感しました。

最後に仁木先生の授業を見せていただきました。チャイムがなる寸前、ある男子生徒がどうしても言いたいことがあると言って、「高校生になっても、僕は差別するかなと思う。」と不安そうに発言しました。彼の本音だと思いました。頭の中では、部落差別は絶対にいけないものだと理解しているものの、心のどこかでまだふっきれないものが残っているのだと思います。彼の発言は何人かの生徒の代弁だと思いました。彼のこの発言は3年生の課題として残されたと思います。板野中学校で部落宣言をした対象地区出身の生徒たちが高校へ進学し、また社会に出て部落差別を受け、どんな悲しみや苦しみを味わうのだろうか想像すると胸が痛みます。2年間必死に取り組んできたことが無駄にならないことを祈る思いです。

板中発表においての3年生全員による合唱は、文化祭のときと比べて格段のできであったと思います。練習のときは、うしろの方の男子が全くやる気がなくダラダラしていたのに、本番にはみんなと同じようになんばってくれました。同和問題学習によせる4名の詩も心の中に響きわたりました。あの子たちは、郡同研にしろ、全同研にしろ、そして中同研にしろ、大きな大会に強いのだと思われます。大きければ大きいほど、参観者が多ければ多いほど、燃えるものがあるような気がします。

3年団の先生方と同和問題の研修に取り組んでいくなかで、自分にとってプラスになったことばかりですたくさんの資料と先生方のお話は、資料の重さと共に私の心の中にずっしり刻みこまれました。また石原先生から教えていただいたことも勉強になり、3年生団にいなければ、石原先生とも出会えていなかったと思います。この教育は、私たち教師が変わらなければならないといわれています。私も私の中にあった同和教育観が、この8か月でいい方に進んだと思っています。来年は担任として生徒たちと共に同和問題学習に取り組んでいきたいと思います。

中同研の夜、我が家では今日の大会のことを主人と話し合いました。日頃口数の少ない主人ですが、同和問題のこととなると人が変わったように意見をいいます。時には、私に意見もしてくれます。森口先生と佐野先生の授業を参観して胸にグッとくるものがあったようでした。差別により悲しい思いを味あわせないためにも、私たち教師が真剣にならなければと思います。

# 中同研大会を終えて

学習会専任指導員 横山達也

中同研大会では、3年D組の授業援助というかたちで参観しました。発表するどの生徒も、自分の思いや考えを発表できていましたし、語尾まできちんと大きな声がでていたように思います。また、一人の生徒が、涙ぐみながら発表したあと、すぐに何人かがその生徒を支えていく姿もみられました。男子生徒が、「自分は、どんなにつらいことがあっても、泣かんと強く生きていきたい。」という発表もあり、涙ぐんで発表した生徒にとって、とても勇気づけられたのではないかと思います。そして、その男子生徒の言葉は、その日の研究授業の中でいちばん印象に残った発表でした。昼からの3年生全員による合唱は、今までで一番よかったです。舞台のそでの方でいたのですが、うしろのどの生徒も力一杯歌っていましたし、入場するときに「がんばれよ」と声をかけると、なんともいえない笑顔でこたえてくれ、そしてその歌声は本当に心が洗われる感じがしました。

今年の一学期から、3年団の一員として、体育館での全体授業を通して、他の先生方や多くの生徒たちから、たくさんのこと学びました。授業に備えての各先生方の熱心な資料検討や準備、また、あゆみや生活ノートなどを通しての生徒たちとの対話など、一日一日の積み重ねが今の3年生をここまで成長させることができたのだと思います。また、生徒たちも、これにこたえるかのように、どんどん自分の意見や考えを読むのじゃなく、相手の目を見て、自分の言葉として、発表できている。ビデオ係をしていましたので、授業後にダビングをするのですが、そんな中で、授業中には気づかなかった様子がわかったりします。全体学習の中で、ある生徒が先生にあてられてうまく発表できなかった。それをくいいるように見守っている生徒が、発表できなかった生徒を残念そうにながめている。仲のよい友として何か言ってほしかった。そんな感じの表情にみました。それから、その次の全体学習では、その2人がにこにこしながら、堂々と大きく手を挙げ、そして自分の意見をみんなの前で、はじめて発表できていました。こんなふうに、生徒たちが少しずつ成長し、頑張っている姿を見続けていたことが、自分自身をも成長させてくれました。部落問題に対して、本当に真剣に取り組まねば、目の前にいる生徒たちがこれだけ頑張っているのだから負けてはいられないと思うようになったのは、この全体学習によるところが大きいと思います。

今年の途中から、学習会の部落問題学習を学専の先生もするようになり、何度も学習をしました。最初は、どう話していいのかわからず、応援に来てくれた3年生の先生方に助けてもらっていたように思います。しかし、学習会の部落問題学習が自分にとって、研究授業と同じぐらい大切な時間にしなければと思い、何からでもいいから、生徒たちの不安なこと、悩み、授業中に言えなかったことなどを聞き、話し合う。そして、自分の思っていることを生徒たちに聞いてもらう。そんな学習でいいんじゃないかと思うようになりました。「あゆみに、きのうの学習会よかったですって生徒が書いとったですよ。」という担任の先生からの話を聞き、大変励みになったときもありました。また、力量不足で、充分に生徒たちにかかわっていくことができない、支えていくことができない自分を腹立たしく思った時もありましたが、前向きに精一杯努力して、学校と学習会とがつながりのあるものとし、部落問題解決に向けて頑張っていきたいと思います。